

# 東日本大震災 15年

## 山梨と被災者中

# 被災地支援バスツアー

東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた宮城県気仙沼市の海水浴場。7日午前、肌を刺すような冷たい風が吹き付ける中、ボランティア15人が、熊手で砂をかき分けたり、消波ブロックの下に潜ったりして、いまだに見つからない行方不明者の痕跡を懸命に探していた。

「巨大な防潮堤もできて、この辺も様変わりしたけど、10年以上たって遺骨が見つかったこともある。私たちボランティアが通い続ける意味があるんです」

タオルを首に巻き、捜索に汗を流す北杜市のバス会社「山梨峡北交通」社長の野口

正人さん(60)が力を込める。この15年、コロナ禍などで休止しながら、被災地にボランティアを運ぶバスツアーを150回以上も運行してきた。

2000年に北杜市で観光バス会社を創業。その後、外国人観光客を誘致するNPO法人の一員として活動するなど地域の活性化に取り組んできた。

11年3月に震災が発生すると、東北に縁もゆかりもなかったが「放っておけない」と体が動いた。約1週間後、交通網がマヒし、仙台市内で身動きの取れない帰宅困難者をバスで迎えに行き、食料や生

バスから続々と降りるボランティアたち



活必需品を被害の大きかった宮城の沿岸部に運んだ。跡形もなく崩れた民家、市街地に打ち上げられた漁船。車窓から初めて見た三

陸の街並みは、以前の姿を想像すらさせず、言葉を失った。「人の手が増えれば、困っている人のためにできることも増える」。同じ思いのボランティアを募り、4月から現地に運ぶツアーを始めた。

物質の輸送にがれき撤去、流された思い出の品の収集、被災した漁師のためのホヤの養殖の手伝い……。復興に向けて、やるべきことは山積しており、ツアーには山梨県民のみならず、外国人も参加した。



行方不明者を捜索する野口さん(7日、宮城県気仙沼市で)

ただ、「助けに向かったはずなのに、逆に地域の人に応援してもらった」と野口さん。

## がれき撤去や捜索活動

その一人が気仙沼市内の大谷地区で自治会役員を務めていた加藤幸一郎さん(74)だ。炊き出し中に野口さんらの活動を知ると、自ら地元の世界話を買ってきて出してくれ、自治会館を着替えや物資の保管などの拠点として使えるようかけ合い、住民らに声をかけて物資の配給を手伝うなどしてくれた。

1300人以上の死者・行方不明者が出た同市。その中でも大谷地区は大きな被害を受けた。加藤さんの自宅は無事だったが、同級生4人を亡くしたといい、「震災で何もかも失い、手つかずの街に来てくれたボランティアの姿は本当に心強かった」と振り返る。

うつむく日々が続く中、加藤さんらは「みんなに上を向いてほしい」と12年夏から海

岸で花火大会を企画。ただ、始まったばかりで屋台が少なく、野口さんが相談を受けると、「二つ返事で『盛り上げ隊』として参加を約束し、焼きそばやフランクフルトなどの屋台を開いて活気づけた。今では地域の人が楽しみにする恒例行事となっている」といい、野口さんは「僕らのほうこそ楽しませてもらった」と目を細める。

一方、街の再生が進むにつれ、ツアー参加者は減少していった。元々、赤字ギリギリだったが、コロナ禍もあって19年に一度、運行を終えた。ただ、その後も、野口さんは仲間内だけで現地で捜索活動を続け、「今も大切な人の帰りを待つ人もいる。もっとできることがあるんじゃないか」との思いが拭えなかった。震災の記憶も風化させたくなかった。

コロナ禍が落ち着いた23年3月、ツアーを再開。年に一度は現地で捜索活動を行い、震災の語り部に体験を参加者に語ってもらうなどの機会も設けた。



まつりの屋台で焼きそばを作る野口さん(左)＝野口さん提供(2013年8月)

これまでの経験を生かし、16年の熊本地震や24年の能登半島地震の被災地でも、がれき撤去などに加わった。「目の前で転んで泣く子どもがいれば、誰でも手を差し伸べるでしょう。それと同じで人助けに理由なんてないよ」。そう照れくさそうに笑う野口さん。これからも、バスを走らせ続けるつもりだ。

(鈴木日南子)